

天下の耳目を塗りて天下に靡然として争ひ務めて文詞を脩飾して世に知られむことを求むので復た本を敦くし實を尙び朴に反へり淳に還るの行があることを知らないやうにするのである。コレ皆な著述者が前に述べたることを啓らくのである。愛云ふ著述も飲くことが出来ないものがあります。春秋の一經でも若し左傳が無いとせば恐らくは曉り難いと存じます。『先生』春秋は必ず傳を待つて後ちに明かなるとする時はコレ歎後の謎語メゾゴと云ふものである。聖人が何を苦しむで此の艱深隱晦の詞を爲すのである。左傳は多くは魯史の舊文である。若し春秋が左傳の文を待つて後ちに明かならば孔子がこれを削らないのである。

愛云ふ伊川も云はるゝに傳はコレ案で經はコレ斷である。某

君を弑し某國を伐つと書したるが如きは若し其の事實を明瞭にせなくては恐らくは斷じ難いと存じます。

『先生』伊川の此の言は恐らくは世儒の説に相ひ沿ふて未だ聖人が經を作るの意を得ないのである。君を弑すると書くのは即く君を弑するが罪である。ダカラ君を弑するの詳かなることを問はないでもよいのである。征伐は天子より令が出づるのであるから國を伐つと書くのは即く國を伐つのがコレ罪である。ダカラ國を伐つの詳かなることは問はないでよいのである。聖人が六經を述ぶるのは只たコレ人心を正だすを要するのである。只だコレ天理を存し人欲を去ることを要するのである。聖人が天理を存し人欲を去ることに於ては常々に言はれてある。或は人が請ひ問ふに因つて各其の人の分量に随つて説かれ

るも肯えて多くは云はないのである。人が専らこれを言語の上
に求むることを恐れられたのである。ダカラ「予欲無言」と云はれ
たのである。若し一切人欲を縦にし天理を存するの事は詳かに
人に示されないのは亂を長じ奸を導くのである。ダカラ孟子が
云ふ「仲尼之門無道桓文之事者。是以後世無傳焉」とコレ孔門の家
法であるに。世儒は只だ一箇の伯者的の學問を講ずるから。許多
の陰謀詭計を知ることとを要するので。純らコレ功利の心である。
聖人が經を作るの意思とは正反對である。先生因つて嘆ぜら
れて云ふ。天徳に達するものでなくは未だ與に此の事の話は出
來ないのである。

『先生』孔子が云ふに「吾猶及史之闕文也」と。孟子が云ふ「盡信書不
如無書。吾於武成取二三策而已」と。孔子が書を刪られたのは唐虞

夏の四五百年間であつて。其の存せられたるは數篇に過ぎない
とすれば。一事もなく述ぶる所が只だこゝに止まるのではな
い。左スレバ聖人の意はこれを見ても知られるのである。聖人は
只だ繁文を刪り去ることを要するのである。に後の儒者は却え
て只だ其の上へ添へやうとするのである。

愛が云ふ。聖人の經を作るは只だ人欲を去つて天理を存するこ
とを要するので。五伯以下の事の如きは聖人が詳かに人に示す
を欲せないとは。誠に御説の通りであります。堯舜以前の事に
至つては如何に略して少しも見さないのであります。

『先生』義皇の世其の事は疎闊だからこれを傳ふるものが鮮な
い。これも其の時が全く淳龐朴素にして略ぼ文采なきの氣象を
想見せらるゝので。太古の治は後世の及ばないのである。

愛云ふ三墳の類の如きも傳ふるものがありますに孔子が何故にこれを刪つたのであります。

『先生』縦ひ傳へたるものがあるも世の變遷に於て漸く適せないので。風氣は益々開けて文采は日に勝つので周の末となつては夏商の俗に變じさせやうとするも既に挽き返へすことが出来なから況して唐虞の世に又た況して義皇の世に返せないのである。然し政治を施すことは同じてはないか其の道は同一である。孔子は「於堯舜則祖述之。於文武則憲章之。」と文武の法は即くコレ堯舜の道である。但だ時に因つて治を致すので其の政令を設施するは既におづから同じくない。即く夏商の事業を周に施さば既に合はないのである。ダカラ「周公思兼三王其有不合。仰而思之。夜以繼日。」と況して太古の治は復た行ふことは出来ない。

ので聖人が略せられたのである。

『先生』専ら無爲を事とするも三王の時に因つて治を致すと云ふことをせないで必ず太古の俗を行ふと思ふは即くコレ佛老の學術である時に因つて治を致すも三王が一に道に本づくこと云ふことをせないで功利の心を以て行ふは即くコレ伯者以下の事である。後世の儒者が許多の講じ來たり講じ去るも只だコレ此の伯術を講じないのである。

附註

文中子姓ハ王名ハ通字ハ仲淹河東龍門ノ人隋開皇元年ニ生ル仁壽四

年ニ闕ニ至リ太平十二策ヲ献ス屏居シテ子弟ヲ教授ス義寧二年ニ歿ス年三十八門人私ニ文中子ト諡ス著ス所ハ中說十篇アリテ世ニ傳フ即チ文中子ト云フ書コレナリ。○韓退之名愈退之ハ其字ナリ唐大曆三年戊申ニ生ル博學宏辭三タヒ吏部ニ試ラルモ第セス後ニ四門博士ニ調ス刑部侍郎ニ遷ル諫佛骨ノ表ヲ上

ツリ。潮州刺史ニ貶セラル。穆宋ノ時ニ吏部侍郎ニ遷ル。長慶四年ニ卒ス。年五十七。
◎孔子六經ヲ刪述スルトハ史記孔子世家ニ書ヲ叙シ禮ヲ傳シ詩ヲ刪リ樂ヲ正
ダシ。易ノ象繫辭說卦文言ヲ序ス。十四年庚申西ニ狩シ麟ヲ獲タリ。孔子春秋ヲ作
ル。易詩書禮樂春秋之レヲ六經ト云フ。◎讒々ハ爭ナリ。悲リ呼ブナリ。又タ多言ナ
リ。◎周禮春官ニ大ト三易ノ法ヲ掌ル。一ニ連山。二ニ歸藏。三ニ周易ト云フ。◎伏羲
神農黃帝ノ書ヲ三墳ト云フ。八卦ノ說ヲ八索ト云フ。九州ノ志ヲ九丘ト云フ。◎淫
哇逸蕩ノ詞トハ放漫邪僻ノ詞ニテ正典ニハアラス。◎始皇ハ史記ニ始皇本紀ニ
三十四年ニ詩書百家ノ語ハ之レヲ焚ク。◎歇後トハ隱語ナリ。◎仲尼之門トハ孟
子惠王篇牽牛章ニ出ヅ。門ノ字ハ孟子ニ徒ノ字ニ作ル。◎盡信書云々ハ孟子盡心
下篇ニアリ。◎五伯ハ孟子告子下篇ニ集註趙氏曰ク。五霸ハ齊桓。晉文。秦穆。宋襄。楚
莊ナリ。一說ニハ夏ノ昆吾。商ノ大彭。豕韋。周ノ齊桓。晉文之レヲ五霸ト云フ。◎仲尼
祖述堯舜。憲章文武ハ中庸ニ出ヅ。朱註ニ祖述トハ遠ク其ノ道ヲ宗トス。憲章トハ
近ク其ノ法ヲ守ルナリ。◎周公思兼三王云々トハ孟子離婁下篇ニ出ヅ。集註ニ三
王トハ禹ナリ。湯ナリ。文武ナリ。時勢ガ殊ナリ。故ニ其ノ事ハ或ハ合ハザル所アリ

思フテ之レヲ得ルトキハ其ノ理ハ初ヨリ異ナラス。

先生云ふ。唐虞以上の治は後世には復せられないから。これを略し
てよろしい。三代以下の治は後世に法とは出来ないから。これ
も削つてよろしい。惟だ三代の治は行ふことが出来るのである。然
し世の三代を論ずるものは其の本を明かにせなくて徒らに其
の末を事とするから。亦た三代の治を復せないのである。

附註 本トハ明德親民。末トハ制度器數ナリ。

潜菴翁曰ク其ノ本トハ惡乎ニカ在ル。明ノ字ハ惡乎ニカ明カナルト。

愛云ふ。先儒が六經を論ずるに春秋を史と爲しますが。史は専ら事
を記するもので。恐らくは五經の事體とは終に稍や異なると存
じます。

『先生』事を以て云ふ時は史と云ふもので。道を以て云ふ時は經

と云ふものである。事即く道で、道即く事である。春秋も經で、五經と史である。易は包犧氏の史で書はコレ堯舜以下の史である。詩禮樂はコレ三代の史と云ふのである。其の事は同じく、其の道は同じと云ふので、ダカラ所謂異なるると云ふものはない。五經も只だコレ史なのである。史は善惡を明かにして訓戒を示すのである。善の訓と爲せるものは特に其の事の迹を存して法を示すのである。惡の戒となるものは其の戒を存して其の事柄を削つて奸を杜ぐのである。

愛云ふ、其の迹を存して法を示すは天理の本然なるを存するので、其の事柄を削つて奸を杜ぐのは人欲の萌さむことを遏むるのでありますか。如何のものであります。

『先生』聖人が經を作るに固より此の意で無いのではないか。又た必ずしも文句には泥着せないのである。愛が又た問ふ、惡の戒となるものは其の戒を存し其の事柄を削つて奸を杜ぐに、何故獨り詩に於て鄭衛の風を刪らないのであります。先儒が云ふ「惡者可以懲創人之逸志」とは、如何のものであります。

『先生』詩は孔門の舊本では無い。孔子云ふ「放鄭聲」又た云ふ「惡鄭聲之亂雅樂也」と、鄭衛之音、亡國之音也。これはコレ孔門の家法である。孔子が定められた三百篇は皆な所謂雅樂である。皆な「可奏之郊廟奏之鄉黨」皆な宣暢和平して徳性を涵泳し、風を移し俗を易ふると云ふので、此の淫を長じ奸を導くものではない。今存したる鄭衛の風は必ず秦火の後に世儒が附會して以て三百篇の數に足したものである。淫泆の詞は世俗に多くは喜むで

傳へたものである。如今閭巷の間にも皆は左様の詞を誦するのである。「悪者可以懲創人之逸志」と云ふはコレ其の説を求めても得ないから従つてこれが辭を爲したのである。

附註 「悪者可以懲創人之逸志」トハ論語爲政ニ詩三百註ノ言ナリ◎放鄭聲ハ論語靈公篇ニ出ヅ◎鄭聲亂雅樂トハ論語陽貨篇ニ出ヅ◎鄭聲ハ鄭國淫亂ノ風ナリ雅樂ハ正樂ナリ。

陸澄問ふ。主一と云ふの功夫は書を讀むが如きは一心に書を讀む上に在り。客に接する時は一心に客に接する上に在る時を主一と爲すことが出来ますかと。

『先生』色を好む時は一心に色を好む上に在り。貨を好む時は一心に貨を好む上に在らば主一とはせられない。コレ所謂る物を逐ふと云ふもので主一とは云へない。主一と云ふは専ら一箇の

天理を主とするのである。

志を立つることを問ふ。

『先生』只だ念々天理を存するを要するは即くコレ志を立つると云ふのである。能く念々天理を存することを忘れなくして久しい時は自然に心中に凝聚するので猶ほ道家に云ふ所の聖胎を結ぶと云ふものである。コレ天理の念が常に存して美大聖神と云ふの域に馴れ至るも只だ此の一念より存養し擴充するのである。

附註 聖胎ヲ結ブトハ精神ガ凝聚ノ處ヲ云フ◎美大トハ孟子盡心下篇ニ可欲之謂善。充實而光輝之謂大。大而化之謂聖。聖而不可知之之謂神トアリ◎孟子盡心上篇ニ「存其心養其性」◎孟子公孫丑上篇ニ「知皆擴而充之」。

孟源と云ふ人が自からは是こして「好色」の病がある。先生が屢ばこれ

を警策せられた。或る日に警責が己むに方つて、一友が自から日比の工夫を陳べて正を請ふた時に、源が其の傍よりして云ふに、
 「此方は尋著源、舊時家當」と

「先生」爾が病は又た發るご云はれたので、源が色を變へて議擬し辨解しやうとした。

「先生」爾が病は又た發るご、因つてこれを喩されて云ふに、これはコレ汝が一生の大病根である。譬へば方丈の地内に一大樹を種へたるが如きである。雨露の滋ひ土脉の力で、只だ此の大根を滋養したのである。其の四傍に縦ひ些子の嘉穀を種えむとするも、上面には此の樹葉に遮られ覆はれて、下面には此の樹底に盤結せられたなら、如何に生長せないのである。ダカラ此の樹を伐り去つて、織き根まで留めなくて始めて、嘉種がうへらるゝので

ある。左モナクテ汝が培壅するに任せば、只だ此の根を滋養するばかりである。

附註 「此方は尋著源、舊時家當」トハ尋著ハ搜索ナリ、家當ハ俗語ニ什器ヲ云フ。此ノ意ハ友人ガ今正ヲ請フ所ハ便チ是レ源ガ昔日ニ用フル所ノ條件ナリト。

問ふ。後世著述の多き、恐らくは正學を亂だすのでありまじやう。
 「先生」人心天理渾然して存すので、聖賢はこれを書に筆しられたることは、寫眞傳神の如きで、人に示すに、形状の大略を以てこれに因つて、其の眞を討求するに過ぎないのである。其の精神意氣言笑動止は、固より傳へられないのである。後世の著述は、又た聖人が畫かく所を以て摹倣騰寫し、妄りに自から分析加増して、其の技を逞ふするから、其の眞を失ふことが愈々遠くなるのである。

問ふ。聖人は變に應じて窮らないと云ふことを預め先づ講求せないのでありますか。如何のものであります。

『先生』何に許多の事を講求せないのである。聖人の心は眼鏡の如きである。只だ心が明かなる時は感ずるに随つて應ずるから物の照さないことはない。己往の形は尙ほ在り。未だ照さざるの形は先づ具はるものではない。後世の講ずる所はソレと同様であるから聖人の學と大に背ひてある。周公が禮を制し樂を作つて天下を文カキざるは皆な聖人が能く爲すのである。ソレに堯舜が盡く爲さないで周公の如き人を待つのである。孔子が六經を刪述して以て萬世に詔カキけられたが、ソレも聖人が能く爲すのである。ソレに周公が先づ爲さないで孔子の如き人を待つのである。が左スレバ聖人は此の時に遇へば方さに此の事があると、只だ

鏡が明かならないことを怕れて、物が來つて照さないのを怕れはせないと云ふことが分明に知れるのではないか。事變を講求するもコレ照らす時の事である。然し學者は先づ箇の明的工夫がなくてはならない。ダカラ學者は惟だ此の心が未だ明かならぬを患へよ。事變の盡すことが出來ないのを患へなくてよいのである。

問ふ。左スレバ所謂「冲漠無朕而萬象森然已具者」と其の言は如何のものであります。

『先生』此の説は本と自からよいのであるが、只だ善く看ないと、これも病痛があるのである。

附註 冲漠無朕等ノ語ハ近思錄道體篇ニアリ。冲漠ハ未ダ形ヲレズシテ萬理畢ツクク具ハルナリ。冲漠トハ虚靜ナリ。無朕トハ幾微萌兆ナリ。

義理は定在なく窮り盡ることがないもので、吾れ子と云ふに少しく得たからとて遂に此に止るとは云はれないのである。再たこれを云ふことが十年二十年五十年なるも未だ止まることはない。他日に又た云はれるに堯舜の聖然かも堯舜の上に善は盡ることはない。桀紂の悪然かも桀紂の下に悪は盡ることはない。桀紂が未だ死せなければ其の悪は寧ろ此の位に止まらないのであらう。善が盡る時があらば文王が何故に「望道而未之見」であらうと。

附註 「望道而未之見」トハ孟子離婁下篇ニ出ヅ。文王視民如傷。望道而未之見。朱註ニハ而ノ字ハ如ノ字ト讀ム。然ルニ王子ガ説ク所ハ恐ラクハ讀ンデ字ノ如シ。

問ふ。知識の長進せないのは如何のものであります。

『先生』學を爲すには本原が無くてはならない。本原上より力を

用ひて漸々に科に盈ちて進まなければならぬ。仙家が嬰兒の事を説くに亦た善く譬ふので、嬰兒が母の胎内に在る時は只だユレ純氣で、何の知識はありはせない。胎を出て、後ちに始めて能く啼き、後ちに能く笑ひ、又た能く其の父母兄弟を識り認むるので、後ち能く立ち、能く行き、能く物を持ち、能く物を負ふに至るので、卒には天下の事は能くせないことではないのである。皆な精氣が日に定る時は筋力が日に強くなり、聰明が日に開くので、ユレ胎を出づるの日に講求推尋したのではない。ガカラ箇の本原が無くてはならないのである。聖人が天地を位し、萬物を育するは只だ喜怒哀樂未發之中より養ひ來るのである。後儒が格物の説を明かにせないで、聖人が知らないことなく、能くせいことなきを見て、初め手を下すの時に講求し盡くそうとするが、此の理

にありはせない。

『先生』志を立て功夫を用ふるは樹を種ゆるやうなものである。其の根芽の時は猶ほ幹は無い。其の幹が出来ると尙ほ未だ枝が無い。枝が出来て後ちに葉が出来る。葉が出来て後ちに花があつて實が出来るのである。初め根を種ゆる時は只管らに栽培灌漑して枝の想ひをせないがよい。葉の想ひをせないがよい。花の想ひをせないがよい。實の想ひをせないがよい。懸想するも何むの益が無い。但だ栽培の功を忘れなくば枝葉花實なきを氣遣はなくともよろしい。

問ふ。書を見るに理が明かないのは如何のものであります。

『先生』只だ文義上に穿ち求むるから明らかないのである。此の通りでは又た舊時の學問をして看得ることが多く、解し得るに

超したことはない。只だコレ其の學を爲すに縦ひ極めて解して明曉なるも、身を終るまで得ないのである。ダカラ心體上に功夫を用ふるがよい。凡べて書を看でも理が明かならない。行ふと思ふも出来ないのは反えて自心上に體當するがよい。即く義理が通ずるのである。四書五經は這の心體を説くに過ぎない。心體とは即く所謂る道心である。體か明かなれば即くコレ道が明かなるので、更に二つはないのである。これは學問を爲すの頭腦の處である。

或人が問ふ。晦菴先生曰。人之所以爲學者。心與理而已。と此の語は如何のものであります。

『先生』心は即く性である。性は即く理である。一の與の字を下す時は恐らくは未だ二と爲すを免かれないのである。これは學者

が善く観なくしてはならない。

或人が云ふ人は皆な此の心がある。心は即く理なのであります。何故に善を爲すものがあり、不善を爲すものがあります。

『先生』悪人の心は其の本體を失ふて居るのである。

澄が象山が人情事變上に工夫を做すの説を問ふ。

『先生』人情事變を除く時は事はない。喜怒哀樂は人情ではないか。視聽言動から富貴貧賤患難死生は皆な事變ではないか。事變も只だ人情の裏に在るのである。其の要は只だ中和を致すのである。中和を致すのは只だ獨りを慎むのに在るのである。

澄問ふ。仁義禮智の名は已發に因つてあるのでありますかと。

『先生』其の通りである。

他日に澄が云ふに。惻隱羞惡辭讓是非はコレ性の表徳アラハレトであり

ますか。

『先生』仁義禮智は也たコレ表徳なので性は一つである。其の形體からは天と云ふので。主宰は帝と云ふので。流行は命と云ふので。人に賦するは性と云ふので。身に主たるは心と云ふのである。心の發するに父に遇ふては孝と云ひ。君に遇ふては忠と云ふので。これより以往名は無窮に至るも只だ一つの性である。猶ほ人は一つであるが父に向つては子と云ひ。子に向つては父と云ふ。これより以往無窮に至るまで只だ同じく人である。人は只だ性上に在つて工夫を用ふるを要するのである。一つの性の字を看る。ことが分明なる時は即く萬の理が燦然なるのである。

澄が一日學を爲すの工夫を論じた。

『先生』人に學を爲すを教ふるには一偏を執つて教へられない。

初學の時は心猿意馬なので「クルヒ」馳せるから栓縛し定らないのである。其の思慮するに多くは人欲の一邊である。ダカラ且らくこれに静坐して思慮を息ましめ、久くして其の心意が稍や定るを俟つのである。只だ懸空に静守して槁木死灰の如くになつてはダメであるから、省察克治を教ふるがよい。省察克治の功夫とは時として閒てなくするので、盜賊を去るが如くに掃除廓清の意が無くてはならない。無事の時に好色好貨好名等の私を逐一に追究搜尋して病根を抜き去り、永く復た起らなくて始めて快とするのである。平常に猫が鼠を捕ふるが如くに、少しも油断をせいなのである。纔かに一念が萌さし、動く時は、即く克ち去り、眞實に功夫を用ふる時は、掃除廓清が出来るのである。初學は必ず省察克治を思ふがよい。即くコレ誠を思ふので、只だ一箇の天

理を思ふのである。

澄問ふ。人が夜になると鬼を怕るものがありますが、如何のものであります。

『先生』只だ平日に義を集むることが出来ないから、心に慊たらないから、怕るのである。

子莘云ふ。正直の鬼は怕れなくてもよろしい。恐らくは邪鬼が人の善惡に拘らないから、怕るを免かれないのであります。

『先生』如何に邪鬼が正しき人を迷はすのではない。只だ、たび怖るのには、即く心か邪である。ダカラ迷はすものがある。鬼は迷はすのではない。心が自から迷ふのである。人が色を好む、即く色鬼が迷はすのである。貨を好む、即く貨鬼が迷はすのである。怒られない時に怒かるのは、コレ怒鬼が迷はすので、懼られない時に懼

れるのはコレ懼鬼が迷はすのである。

澄が鴻臚寺に在る時に寄居したが忽ち兒の病が危しと云ふ家信が着いた。其の時澄が甚だ憂悶して堪へられなかつた。

『先生』此の時に功夫を用ひなくてはならない。若し此の時に放過することがあらば、閑時の講學は何の爲めである。此れ等の時に在つて磨鍊するを要するのである。父の子を愛するは自づからコレ至情である。然し天理も自づから中和の處がある。過ぐれば即く私意となる。人は此の處に於て多くは認めて天理は愛すべきと做すから一向に憂苦するのであるか。既にコレ「有所憂患不得其正」と云ふことを知らない。大抵七情の感ずる所は多くは只だ過ぎて及ばないものは少くない。才ツツカかに過ぐる時は心の本體ではない。必ず調停適中をして始めて得らるのである。父母の

喪は人子たるものゝ一哭して死して心に快よきを欲せないのではないか。然し「毀不滅性」と云ふてあるのは聖人がこれを制するのではない。天理本體に自づから分限があるから過ごされないのである。人は但だ心體に自然分毫も増減し得ないことを識るを要するのである。

附註 「毀不滅性」トハ孝經喪親章ニ云フ「毀不滅性此聖人之政也喪不過三年示民有終也」

夜氣は常人に就いて説くのである。學者が能く功夫を用ふる時は日間に事あるも事なきも皆な此の氣が翕聚發生の處であるが。聖人は夜氣を説くことを消キヲひないのである。

附註 夜氣ノ説ハ孟子告子篇ニ出ツ。夜氣ノ存ズル所ハ色知ナリ。夜氣ハ至ツテ清シ。平旦ノ氣モ亦タ清シ。故ニ其ノ好惡ハ人ト相ヒ近キナリ。

澄が操存亡舎の章を問ふ。

『先生』「出入無時莫知其郷」とは常人の心について説くも、學者が心の本體は原とコレ此の如くなることを知る時は操存の功夫が始めて病が無い。出るを亡とし入るを存とは云はれないのである。若し本體を論ずる時は原と「無出入」ものである。若し出入を論ずる時は其の思慮運用はコレ出づると云ふので併し主宰が常に昭々此の在る時は出づるとは云へない。既に出づる無き時は何に入ることはない。程子が所謂「腔子」とは亦た只だコレ天理である。終日應酬するも天理の外に出でない時は即くコレ「在腔子裏」と。若し天理を出づる時は放ともいひ。亡とも云ふのである。又た云ふに。出入と云ふも只だコレ動靜である。「動靜無端」と云へは郷はありはせない。

附註 孟子告子上篇ニ孔子曰操則存舎則亡出入無時莫知其郷唯心之謂歟◎程

子曰必要在腔子裏腔子ハ軀殼ト云フガ如シ◎動靜無端トハ伊川繫辭傳ノ語ナリ

問ふ。孟子が云ふ「執中無權。無權猶執一」と云ふは如何であります。

『先生』中とはコレ天理である。只だコレ易である。時に随つて變易するから如何に一を執り得ない。コレ時に因つて宜しきを制せねばならないのである。預め先づ一箇の規矩を定め難いのである。後世儒者の如きは道理をモツテ一々説いて罅漏なく。格式を立て定ることを要するは。これが一を執ると云ふものである。唐詡が云ふ。志を立つとは常に此の善念を存するので。善を爲し惡を去ることを要するのでありますか。如何であります。

『先生』善念存する時は即く天理である。此の念は即く善である

から更に何の善を思はなくでよい此の念が悪てなくば更に何の悪を去らないでよい此の念が樹の根芽の如きである志を立てるものは此の善念を長じ立つるのである「從心所欲不踰矩」は只だコレ志が熟する處に到るのである。

附註 論語爲政篇ニ出ヅ「七十而從心所欲不踰矩」トハ孔子ガ學問ガ熟スル處ニ到リ心ガ欲スルガ儘ニスルモ道ニ違ハズト云フコトナリ。

問ふ。文中子は如何なる人であります。

『先生』文中子は體を具へて微なるに近し惜らくは其の蚤く死たるのである。

問ふ。如何なる却えて經に續くの非りがあります。

『先生』經に續くも末だ盡く非りとすることは出来ない。其の由を請ひ問ふと。

『先生』良や久うして云はるゝに更に良工は心獨り苦むと。

附註 文中子韓退之トヲ問フノ說話ト對照セバ明瞭ニ解スベシ。

已れに克つとは私欲を掃除廓清して一毫だも存せないを要するがよい。一毫だもある時は衆悪が相引ひて來るのである。

律呂新書を問ふ。

『先生』學者は當務爲急のである。此の數を算へ得て熟するも恐らくは役には立たない。必ず心中に先づ禮樂の本を具へたがよい。其の書説には多く管を用ひて氣を候ふのである。然し冬至の時刻に至るも管灰の飛ぶに先後あり。須臾の間に管が冬至の時刻にチヨウド値たることが知らない。ダカラ自から心中に先づ冬至の時刻を曉つて始めて得めらるのである。管灰の説は通ぜない處がある。學者は先づ禮樂の本原上より功夫を用ふるがよ

いのである。

先生云ふ諸公には近頃見る時に疑問が少ないのは何である。人が工夫を用いない時は自から既に學を爲すを知り只だ循つて行ふことを是とせないことはないが殊にいつか私欲が日に生ずること地上の塵の如くに一日掃はない時は又た一層あるを知らない。著實に工夫を用ふる時はスグ見へるのである。道には終窮は無い。愈々探ぐる時は愈々深いので必ず精白にして一毫も通徹せないことが無くてよいのである。

問ふ道は一つであります。古人が道を論しますに同じくありませむが此の道を求むるにも要領がありますか。

『先生』道には方體がない執着は出来ない却えて文義上に拘り滞る時は道を求むるに遠いのである。如今に人が只だ天を説く

に其の實は天を見ない。日月風雷は即く天であると云ふも云はれない。人物草木はコレ天でない。と云ふも云はれない。道は即く天である。若し識り得たる時はいつれに適くとも道である。無いことは無い。人は但だ各其の道の一隅の見より認定して。道は此の如しであると思ふから同じくないのである。若し裏に向つて自己の心體を見得る時は即く「無時無處而不是此道」と古に亘り今に亘り終りなく始めなく更に甚むの異同はありはせない。心は即く道である。道は即く天である。心を知れば道を知り天を知るのである。

諸君が實に此の道を見やうと要せば自己の心上より體認するがよい。外に求めなくて得らるゝのである。

數項の源なきの塘水よりは數尺の源ある井水の生意が窮らない

に超したことはない。時に先生が塘水の邊に在つて坐せられた。傍らに井があつた。ダカラ此の語を以て學問に喩へられたのである。

問ふ。世道日に降つて太古の時の氣象は如何にして復た見得るのであります。

『先生』一日はスグ一元である。人が平旦の時に起坐して未だ物と接せない時は此の心は清明の景象で伏羲の時にあつて遊ぶが如きと一般である。

附註 經世書ニ十二萬九千六百年ヲ一元ト爲ストアリ。

問ふ。心が物を逐むと要する時は如何にしたならばよいのであります。

『先生』人君は端拱清穆にして六卿は職を分つ時は天下が治る

のである。心が五官を統ぶるも此の如きを要するのである。ソレに今眼が視むとする時は心がスグ色上に逐在し、耳が聽かむとする時は心がスグ聲上に逐在するのである。人君が官を選ぶ時には自から吏部に坐し、軍を調する時には自から兵部に坐する如きは惟だに君の體を失却するのみではない。六卿も其の職を得ないのである。

附註 五官ハ耳目鼻口形ナリ。◎六卿ハ太師太傅大保三公ト稱ス。少師少傅少保三孤ト爲ス。合セテ六卿ト云フ。時代ニ依ツテ名稱ハ異レリ。

善念發してこれを知り、知つてこれを充て、惡念發してこれを知り、知つてこれを遏むのである。知ると充つると遏むとは天の聰明である。聖人は只だ是れあるので、學者は是れを存するに功夫を用ふるのである。

「志至氣次」と云ふことを問ふ。

『先生』志の至たる所は氣も亦た「至焉」の謂で、極至次貳の謂ではない。其の志を持する時は氣を養ふは其の中に在るのである。其の氣を暴ふなき時は亦た其の志を持するのである。孟子が告子の偏を教ふのであるから、此の如く夾持して説いたのである。

附註 「志至氣次」トハ孟子公孫丑上篇浩然章ノ語ナリ。○夾持トハ「持志」ト「無暴氣」トヲ夾ミ説クナリ。

問ふ。先儒が云ふ「聖人之道必降而自卑。賢人之言則引而自高」とは如何のものでありませう。

『先生』左様ではない。此の通りでは却えてコレ偽りである。聖人は天の如きで「無往而非天」と云ふのである。三光の上は天である。九地の下も天である。天が何むぞ降つて自から卑くすること

は無い。これ所謂「大而化之也」と云ふのである。賢人は山嶽の如きである。其の高きを守るのみである。然し百仞のものは引いて千仞とはならない。千仞のものは引いて萬仞とはならないのである。賢人は未だ嘗つて引いて自から高くせないのである。自から高くする時は偽りである。

問ふ。「顔子没而聖學亡」と此の語に疑ひが無いとは申されませむ。

『先生』聖道の全きを見るものは惟だ顔子である。喟然の一嘆を觀ても見られるのである。其の「夫子循々然善誘人。博我以文。約我以禮」と云ふはコレ道を「見破ふるの」後ちに「此の如く説いたのである」。「博文約禮」は如何に善く人を誘くのであるか。學者はこれと思はなくてはならない。道の全體は聖人も人に語り難いのであるから。學者は自から修め自から悟るがよい。「顔子雖欲從之。未由

也已」とは即く「文王望道未見」の意である。「望道未見」とはコレ眞に見たのである。顔子が没してから聖學の正派は遂に盡く傳はらないのである。

附註 「顔子没而聖學亡」ノ語ハ王子ガ湛甘泉ニ別カル序文ニアリ◎「喟然一嘆」ハ論語子罕篇ニ見ヘタリ。

尙謙が孟子が「不動心」は告子と異なるの事を問ふ。

『先生』告子は此の心の硬く把握して心が動かないことを要するのである。孟子は却えて集義上よりして自然に動かないに至るのである。心の本體は原と自から動かないものである。心の本體は即く性である。性は即く理である。性は原と動かない。理は原と動かない。集義とはコレ其の心の本體に復するのである。

侃問ふ。志を持すには心痛の如く一心に痛上にある時は、閑語を説

き閑事を管するの暇はありませむと。

『先生』初學の工夫は此の如く用ふるもよろしい。但だ出入無時莫知其郷「原」とコレ此の如くなるを知らしむを要するので工夫が始めて著落があるのである。若し只だ死々守著する時は恐らくは工夫の上に又た病を發するのである。

侃問ふ。涵養することを専らにして講求を務めない時は欲を認めて理と作さむとする時は如何にしたらば宜しくあります。

『先生』人はコレ學と云ふことを知らなくてはならない。講求も只だ涵養なのである。講求せないのは只だ涵養の志が切實にないのである。

侃云ふ。何を學を知ると云ふのであります。

『先生』其の方が何の爲めに學び箇の甚を學ぶと云ふことか云ひ聞かせよと。

答ふ。先生の教を承りますに學とはコレ天理を存するを學ぶので。心の本體は即くコレ天理で。天理を體認するは自心地に私意が無いことを要するのであります。

『先生』此の如くなれば只だ私意を克ち去つてよい筈であるのに。又た甚ぞ理と欲とが明かならないのを愁ふるのである。答ふ。恐らくは這の些しの私意を認めて眞ならないのであります。

『先生』總べてコレ志が未だ切實ならないのである。志が切實なる時目で視る目で聽く皆志がここに在るのであるが認めて眞ならない道理はない。是非の心は人皆な有るので外に求むを假

らないのである。講求と云ふも只だ自心が見る所を體當するもので。心外に別に此の見があることを成さないのである。

書を觀て多く晦庵を摘議するものがあつた。

『先生』これは異同を求むるに心があるからよくない。吾が説は晦庵と時には同じくない處がある。コハ入門に手を下すの處に毫釐千里の分があるから辨せねばならないのである。然し吾の心は晦庵の心と異ならないのである。其の他文義の解し得て明當なる處は如何に一字も動かすことは出来ないものである。

先生が學者に謂はれたに學を爲すに此の頭腦を得なくてはならない。頭腦を得て工夫が始めて著落があるのである。縦ひ間斷があるも舟の舵がある如くである。一たび提ぐる時はスグ醒むるのである。左モナクテ學に従事するも只だ義襲ふて取ることを

做すのである。只だコレ「行不著習不察非大本達道也」と道を見得る時は横に説き、豎に説きするも皆な道に當たるので、若し此の處に通じて彼の處に通ぜない時は只だコレ未だ見得ないのである。

或は人が問ふ。親を養ふの故であるから學を業とするの累を免かれないので、學問を爲すに妨げらるゝのであります。

『先生』親の故だから學を業とするは學問に累すとすれば、田を治めて以て其の親を養ふも學に累があるか。先正が云ふに「惟患奪志」と。但た學を爲すの志が真切にならないのを恐れるのである。

崇一問ふ。尋常に意思が多くは忙しい事があるは固より忙しい事か無くても忙しいのは何であります。

『先生』天地の氣機は原と一息の停りが無いのであるが、然し此の主宰がある。ダカラ「不先不後不急不緩」と云ふので、千變萬化するも主宰が常に定るのである。人は此の氣を得て生れるのである。若し吾が主宰が定る時は天運と一般で怠ないので、萬變に酬酢するも常にコレ從容自在である。所謂「天君泰然百體從令」と云ふので、若し主宰が無い時は只だ這の氣が奔放するから忙しいのである。

附註 天君泰然云々ハ范淳ガ心箴ノ語ナリ。孟子盡心篇集註ニ出ヅ。天君トハ心ヲ指スナリ。

先生が云れるに學を爲すの太病は名を好むに在るのであると。

侃云ふ。前歳より此の病は既に輕くなつたと自から思認して居りましたが、比來精察しますと全く去らないことを知りました。

此の病は必ず外を務めて人の爲めにするのではありませむ只だ譽めらるゝを聞いて喜び毀らるゝを聞いて悶ウレへるので即くコレ此の病が発るのであります。

『先生』其の説は最も是である。名は實と對するので實を務むるの心が重きこと一分なる時は名を務むるの心が軽きこと一分である。全くコレ實を務むの心であれば即く全く名を務むるの心が無くなるのである。若し實を務むるの心が饑える時は食を求め渴する時は飲を求むるが如きであれば更に名を好むの工夫があらう筈はないのである。

「疾没世而名不稱」とは稱の字は去聲に讀むがよい。聲聞過博君子耻之の意味である。實が名に稱はざる時は生て猶は補ふことが出来るが没する時は及ばないと云ふのである。四十五十而無聞

とは道を聞かないと云ふので聲を聞かないと云ふのではない。孔子が云ふ「是聞也非達也」と聖人が肯えてこれ等の事を人に望むのではない。

附註 没世云々ハ論語衛靈公篇ニ出ヅ。朱註ニ稱ノ字ヲ稱譽ノ義ト爲ス。聲聞過情云々ハ孟子離婁下篇ニ出ヅ。朱註ニ聲聞ハ名譽ナリ。情ハ實ナリ。◎四十五十云々ハ朱註ニ聞ノ字ハ聲聞ノ義トナス。無聞ハ道ヲ聞クコトナキナリ。◎是聞也ハ論語顔淵篇ニ出ヅ。

侃が悔ゆることが多くある云ふと

『先生』悔悟は病を去るの薬である。然しこれを改むが貴ひのである。若し悔悟の念が胸中に留滞する時は又た薬から病が発るのである。

樹を種ゆるには必ず其の根に培ふのである。徳を種ゆるには必ず

其の心を養ふのである。樹を長くしやうとするには必ず始めて生へる時に其の繁げき枝を刪り、徳を盛むにしやうとするには必ず始めて學ぶ時に夫の外好を去るのである。如し外に詩文を好む時は精神が日に漸く漏泄して詩文の上に在るのである。詩文文けではない。凡百の外好は皆な同じことである。我れ學を論ずるにはコレ無中に有を生ずるの工夫である。只だコレ立志である。諸公が信し得ることを要するのである。學者が一念に善を爲すの志は樹を種ゆるが如くである。只だ助くる勿かれ忘る勿かれと。只管らに培植するのである。自然に滋長して生氣は日に完く。枝葉は日に茂げるのである。樹の初めて生へる時に繁き枝を刊落するので根幹が能く大になるのである。初學の時に外好を去るのである。ガカラ志を立つるは專一を貴ぶのである。

である。

先生の門に某人は涵養の上に功夫を用ひ、某人は識見の上に功夫を用ふるのである。

『先生』涵養を専らにするものは日に其の足りないことを見るのである。識見を専らにするものは日に餘りがあるを見るのである。日に足りないと思ふものは日に餘りがあるので、日に餘りがあると思ふものは日に足りないのである。

梁日孚が問ふ「居敬窮理」とは兩事でありますに、先生は一事と爲さるゝのは如何のものであります。

『先生』天地の間に只だ此の一事があるので、兩事は無い。若し萬殊を論ずる時は禮儀三百威儀三千である。兩事に止るのでは無い。敬に居るとは如何なるもの、理を窮むるとは如何なるものと

公且レらく言レひ聞レせよ。

日孚云ふ「居敬」は存養の工夫で「窮理」とは事物の理を窮むるのであります。

『先生』箇の甚オを存養するのである。

日孚云ふ此の心の天理を存養するのであります。

『先生』此の如きも只だ理を窮むのるある。如何にして事物の理を窮むると云ふことを言レひ聞レせよと。

日孚云ふ親に事ふるの如きは孝の理を窮むことを要するので、君に事ふるには忠の理を窮むるを要するのであります。

『先生』忠と孝との理は君と親との身上に在るのか、自己の心上に在るのか、若し自己の心上に在るなら只だコレ此の心の理を窮むるのである。コレ敬とは如何のものであるか説き聞レせよと。

日孚云ふ只だコレ一を主とするのであります。

『先生』如何なるものが一を主とするのである。

日孚云ふ書を讀むが如きは一心に讀書の上に在るので、事に接するには一心に事に接する上に在るのであります。

『先生』此の如くなる時は酒を飲む時は一心に酒を飲む上に在るので、色を好む時は一心に色を好む上に在るのは却えて物を逐ふのである。敬に居るの功夫を成すのではない。

日孚が此の言を聞いて益を請レひ問レふた。

『先生』一とは天理である。主一とは一心に天理上に在るのである。若し只だ主一と云ふことを知つて一は即レくコレ理なることを知らない。ので事ある時にはスグ物を逐ふので、事なき時にはコレ空に著レくのである。惟だ其の事あり事なきも一心に皆な天理

上。に。在。つ。て。功。夫。を。用。ふ。る。の。で。あ。る。敬。に。居。る。と。は。即。く。理。を。窮。む。る。の。で。あ。る。理。を。窮。む。る。專。一。の。處。に。就。い。て。説。く。時。は。敬。に。居。る。と。云。ふ。の。で。あ。る。敬。に。居。る。精。密。の。處。に。就。い。て。説。く。時。は。窮。理。と。云。ふ。の。で。あ。る。敬。に。居。て。別。に。此。の。心。が。理。を。窮。む。る。あ。つ。て。理。を。窮。む。る。時。に。別。に。此。の。心。が。敬。に。居。る。の。で。は。な。い。名。は。異。な。る。が。功。夫。は。只。だ。一。事。で。あ。る。易。に。敬。以。直。内。義。以。方。外。と。云。ふ。が。如。き。は。敬。は。即。く。コ。レ。事。な。き。時。の。義。で。あ。つ。て。義。は。即。く。コ。レ。事。あ。る。時。の。敬。で。あ。る。兩。句。を。合。せ。て。一。件。に。説。く。の。で。あ。る。孔。子。が。修。己。以。敬。と。云。ふ。が。如。き。は。即。く。義。を。云。は。な。い。で。其。の。中。に。あ。る。孟。子。が。集。義。を。云。ふ。も。即。く。敬。を。云。は。な。い。で。其。の。中。に。あ。る。の。で。あ。る。會。得。す。る。時。は。横。説。堅。説。す。る。も。工。夫。は。總。べ。て。一。般。で。あ。る。若。し。文。に。泥。み。句。を。逐。ふ。て。本。領。を。識。ら。な。い。時。は。即。く。支。離。決。裂。で。功。夫。は。都。べ。て。下。落。が。な。い。

日孚問ふ。理を窮むるは如何の譯で、即くコレ性を盡すのであります。

『先生』心の體は性である。性は即く理である。仁の理を窮むるに眞に仁が仁を極むるを要するのである。義の理を窮むるに眞に義が義を極むるを要するのである。仁義は只だコレ吾が性である。だから理を窮むるは即くコレ性を盡すのである。孟子に「充其惻隱之心至仁不可勝用」と説くが如きは、コレ理を窮むるの功夫である。

日孚云ふ。先儒が一草一木も皆な理ありと云ふ。察せねばならな

いと存じますと。
『先生』夫れ我れは則ち暇がないのである。公は先づ自己の性情を理會して「能盡人之性然後盡物之性」がよいと。

日孚が此の言を聞いて悚然として悟る所があつた。

附註 『禮儀三百威儀三千』下ハ中庸ノ語◎『居敬窮理』トハ朱子ノ語◎『敬以直内義以方外』トハ易ノ文言ニ出ヅ◎先儒トハ程伊川ナリ

惟乾が問ふ。知とは如何に心の本體であります。

『先生』知とはコレ理の靈なる處である。其の主宰の處について説く時は心と云ふので、其の稟賦の處について説く時は性と云ふのである。『孩提之童無不知愛其親無不知敬其兄』只だコレ這箇の靈能が私欲の爲めに遮られ隔られないで充拓し盡す時は本體を完々して天地と徳を合するのである。聖人より以下は蔽はれがある。ガカラ物を格し其の知を致すのである。

九川問ふ。此の功夫は心上に體驗して明白であります。只だ書を解して通ぜないのであります。

『先生』只だ心を解するを要するのである。心が明白なる時は書は自然に融會するので。若し心上に通ぜない時には只だ書上の文義の通ぜむと要せば却えて自から意見を生ずるのである。一屬官があつた。其の屬官が久しく先生の學を講ぜらるを聽くによつて云ふ。此の學は甚だ好いが、只だ簿書訟獄の繁雜だから學を爲すことが出来ない。

『先生』これを聞き我れ爾に簿書訟獄を離れて懸空に學を講ずることを教へたのではない。爾既に官司の事があるではないか。官司の事上より學を爲す時は纔かにコレ眞の格物と云ふのである。一詞訟を問ふが如きは其の應對が無狀であるから怒る心を起してはイケナイ。彼れが言語圓轉だから喜ぶ心を生じてはイケナイ。其の屬託を惡み意を加へてこれを治めてはイケナイ。

其の請求があるから意を屈してこれに従ふてはイケナイ。自己の事務が煩冗だから意の儘に荀且にもこれを斷してはイケナイ。旁人が讒毀し羅織するから人の意思に随つて處置してはイケナイ。此の許多の意思は皆な私である。是れ等の事は只だ爾が自分で私と云ふことを知るのではないか。左スレバ精細に省察克治するがよい。此の心に一毫だも偏倚があつて人の是非を枉くるを恐れるのである。コレ格物致知である。簿書訟獄は皆な實學である。若し事物を離了して學を爲す時は却えて空に著るのである。

于中國裳の輩が同じく先生の食に侍する時に。

『先生』凡べて飲食は只だ我が身を養ふことを要するので、食を消化することを要するのである。若し徒らに蓄へ積むで肚の裏

に在る時はスグ痞を成すので肌膚を長じ得ないのである。後世の學者は博聞多識が胸中に留滯するのは皆な傷食の病である。聖人は功業氣節が無いのではないが、但だ其の天理に循ふ時はスグ道である。事功氣節を以て名づけられないのである。

門人座に在つて動止が甚だ矜持するものがあつた。

『先生』人が若し矜持することが太過なれば終に弊があるのである。

問ふ。矜持が太過なれば如何に弊がありすか。

『先生』人は只だ許多の精神がある。若し専ら容貌上に功夫を用ふる時は中心に照管し及はないものが多いのである。

太な眞卒なるものがあつた。

『先生』如今此の學を講ずるに却えて外面は全く檢束せないの

は又た心と事とを分つて二爲すのである。

門人が文を作り友の行を送つて先生に問ふに文字を作れば思を費やすことを免かれないので作り了つて後ち又た一二日は常に記して懐にありますと。

『先生』文字の思索も害は無いが但だ作り了つて常に記して懐にある時は文の爲めに累はされて心中に一物があるのである。これは未だイケナイのである。

又た詩を作り人を送るものがあつた。

『先生』詩を看畢つて凡べて文字を作るは我が分限の及ぶ丈けに随ふことを要するのである。若し説き得て太過なる時は辭を修めて誠を立つといふものではない。

常に氣を動かして人を責め易い一友があつた。

『先生』これを警め學は己れが心に反して省るがよい。若し後らに人を責むる時は只だ人の不是なることのみが見へて自己の非なることが見へないのである。若し能く己れが心に反して省る時はソコデ自己が許多の未だ盡さない處が分るので。ナカナカ人を責むるには暇がないのである。舜が能く弟の象が傲なるを化するに。只だ象の不是なることを見ないのである。若し舜が只だ象が姦惡を正さむことを要する時はスグ象の不是なることが見るのである。象が傲人だから必ず相ひ下ることを肯ぜないのであるから。如何にこれを感化し得ないのであると。

此の友が感悔をしたので。

『先生』爾今後は只だ人の是非を論ずることを要せないのである。凡べて人を責辨せなければならぬ時には其の一つの大己

私を把つて克ち去ればよいのである。

凡へて朋友の問難には縦ひ淺近粗疎にして或は才を露はし己れを揚くるものあるも皆コレ病の發つたのであるから其の病に因つてこれを藥すればよいのである鄙み薄うするの心を懐いてはイケナイ「君子與人爲善」の心でないのである。

附註 孟子公孫丑上篇「故君子莫大乎與人爲善」トアリ

一友問ふ書を讀むで記し得ないのは如何のものであります。

『先生』只だ曉ることを要するので記することを要しないのである。曉ることを要する時は己にコレ第二義に落つるのである。只だ自家の本體を明かにするを要するのである。若し徒らに記することを要せば曉り得ないのである。若し徒らに曉ることを要する時は自家の本體を明かにし得ないのである。

王汝中省曾の二子が待坐す時。

『先生』扇を握りて備們も扇を用ひよと。

省曾が起つて對えて云ふに敢て用ひませむと。

『先生』聖人の學はコレ這等に捆縛苦楚なるものでは無い。コレ道學の模樣を粧ひ做すのではない。

汝中云ふ仲尼が曾點との志を云ふの一章を觀ても略ぼ其の有様が見へるのであります。

『先生』其の通りである。此の章を觀るに聖人は何等の寛洪包含の氣象である。師たるものが志を群君子に問ふに三子は皆な整頓して對ふに曾點は瓢々然々として那の三子が眼前にあるを看なくて自から瑟を鼓するは何等の狂態である。設し伊川ならば或は斤け罵らるであらうに聖人は復た彼れを稱し許せるの

は何等の氣象である。左スレバ聖人が人を教ふるには人を束縛して普通一般にはしない。狂者の如きは狂なる處より成就するので。狷者は狷なる處より成就するのである。人の才氣は一般に同じくすることは出来ないのである。

先生が陸元靜に語けて元靜は少年であるも。五經を解すること。要するのは其の志も博きを好むのである。但だ聖人の人を教ふるは只だ人が簡易ならぬのを怕れるのである。聖人の説くのは皆なコレ簡易の規である。今人が博きを好むの心からこれを觀る時は却えて聖人が人を教ふるには差がふに似たると思ふのであらうと。

先生が南鎮に遊ぶ時に一友が巖中の華樹を指して問ふて云ふに。天下に心外の物なしと。此の華樹の如きは深山の中に在るので。

自から開き自から落つるので。我が心には相ひ關せないのであります。

『先生』爾未だ此の華を看ない時は此の華は汝が心と同じく寂に歸するのである。爾が來つて此の華を看る時は此の葉の顔色は一時に明白である。左スレバ此の華が爾の心外で無いことを知るのである。

問ふ。大人は物と體を同じくすると云ふに。大學に又た厚薄を説いてあります。如何のものであります。

『先生』惟だ道理は自然に厚きと薄きがあるので。比へば身はコレ一體であるが。手足を把つて頭目を捍くが如きは偏へに手足を薄うするのではない。其の道理は此の如くある筈である。禽獸と草木とは同じく愛するものであるに。草木を把つて禽獸を養

ふて心に忍ぶのである。人と禽獸とは同じく愛するものである。に。禽獸を宰して親を養ひ。祭祀に供へ賓客を燕して心に又た忍ぶのである。親と路人とは同じく愛するものである。簞食豆羹の如きこれを得る時は生る。得ない時は死すと。コレは兩つながら全くすることが出来ない時はイッソのこと。至親を救ふて路人を救はない。其の時には心に又た忍ぶのである。這れ此の道理は此の如きである。吾が身と至親とに至つては更に彼れ此れ厚薄を分別することは出来ない。都べて「仁民愛物」云ふことは皆な此の處より出づるので。此の處を忍べば更に忍ばない處は無いのである。大學に謂ふ所の厚薄とはコレ良知上自然の條理で。踰越せられないのである。これを義と云のである。此の條理に順ふ時は禮と云ふのである。此の條理を知る時はこれを智と云ふの

である。此の條理を終始するはこれを信と云ふのである。目には體は無い。萬物の色を體とするのである。耳には體は無い。萬物の聲を體とするのである。鼻には體は無い。萬物の臭を體とするのである。口には體は無い。萬物の味を體とするのである。心には體は無い。天地萬物感應の是非を體とするのである。

問ふ。樂とはコレ心の本體とは聞ひて居りますが。大故に遇ふの時は此の樂は還つて在りますが。否らずであります。

『先生』コレ大哭し了つて方さに樂しいのである。哭せねば樂まない。のである。哭するも此の心が安い處は即く樂である。本體は動かないのである。

郷人に父子の訟獄があつて。先生に訴へむことを請ふた時に侍者がこれを阻まむと思つたが。先生がこれを聽かれた。其の言の終

らないのに。父子が相ひ抱いて慟哭して去つた。柴鳴治が入つて問ふて云ふに。先生ナント感悔を致したのは速かなことでありますと。

『先生』我れは云ふに。舜はコレ世間の大不幸なる子である。瞽瞍はコレ世間の大慈なる父である。

鳴治が聞ひて愕然として驚き。其の由を請ひ問ふた。

『先生』舜は常に自から大不孝と思つて居るから能く孝なるのである。瞽瞍は常に自から大慈なると思つて居るから慈でないのである。瞽瞍は只だ舜は我が孩提の時より生長させたのを覺へて居るに。今は何故に我を豫悦せないのであると思つて居るも。自心が己に後妻の爲めに心が移れることを知らないのである。ソレに尙ほ自分は能く慈なると思つて居るから愈々慈でない。

いのである。舜は只だ父が我を孩提する時は如何に我を愛せられたであろうに。今日の愛せられないのは只だ我が孝を盡さないののであると思ひ。日々に孝を盡さないの處を思ふから。愈々能く孝なるのである。瞽瞍豫を底たすの時に至るに及むでは。又た此の心が原と慈的本體に復へるに過ぎないのである。ダカラ後世に舜は古今大孝の子。瞽瞍も此の慈父となるを稱するのである。

附註 正徳五年先生三十九歳。廬陵知縣ニ陞ル。政ヲ爲スニ威刑ヲ事セズ。惟ダ人心ヲ開導スルヲ本ト爲ス。民皆ナ勝氣。囂訟ヲ悔ヒテ涕泣スルモノアルニ至ル。此ノ條ノ如キハ蓋シ其ノ一ナルカ。◎孩提ハ二三歳ノ童ニシテ孩笑スルヲ知ル。提ケ抱クベキモノヲ云フ。

『先生』「烝々ヲサ父不格ヲサ姦」とは本註に説くに。象が己に善に進むで大に

姦惡を爲すに至らずと、舜が徴されて庸らるの後に、象が猶ほ日に舜を殺すを事と爲すのはナント大姦惡である。舜は只だ自から又むるに進み、又むることを以て薰蒸して象か姦惡を正さないのである。凡へて過を文り慝を揜ふは悪人の常態である。若し彼れが是非を指摘せむことを要する時は反えて彼れが悪性を激するのである。舜が初めの時に象が已れを殺すことを要するを致すも、舜が象の好を要するの心が太だ急なるのである。コレ舜の過ぎたる處である。經過してから功夫は只だ自己にある。コレを知つて人を責めないから克く諧くことを致したのである。コレ舜が「動心忍性增益不能處」なのである。古人の言語は俱に自家が經歷し過ぎ來たから説いて親切なので、後世に遺して曲さに人情に當たるのである。若し自家が經過しなくては、如何に舜が

許多苦心の處を得ないのである。

先生云ふ古樂の作らないことが久しいのである。今の戲子は尙ほ古樂の意思と相ひ近いものであると、洪が先生の意味が未だ分らないので請ひ問ふた。

『先生』韶の九成はコレ舜が一本の戲子である。武の九變はコレ武王が一本の戲子である。聖人が一生の實事は俱に樂中に播在するのであるから有徳者がこれを聞く時は、其の樂は「盡善盡美」と「盡天未盡善」との處を知るのである。後世の樂を作るが若きは只だ些しの詞調を做するのであるから、民俗の風化には絶えて關涉はしない。ガカラ民を化し俗を善にすることは出來ないのである。今民俗が朴に反へり淳に還えることを要するならば、今の戲子を取つて妖淫の詞調は盡く去つて、只だ忠臣孝子の故事を

取。り。愚。俗。百。姓。に。曉。り。易。く。し。て。意。な。き。中。に。良。知。を。感。激。し。て。起。す。時。は。卻。え。て。風。化。に。益。か。あ。ろ。う。左。ス。レ。バ。古。樂。は。漸。次。に。復。す。る。こ。と。が。出。來。る。

洪云ふ。元氣を求めむとするも得られないので恐らくは古樂に於ても復し難いと思ひます。

『先生』 爾元氣は何れの處に在つて求むるか。

洪對ふ。古人管を制して氣を候すとは恐らくはコレ元氣を求むるの法でありましやう。

『先生』 若し葭灰黍粒の中に求めむと要せば、卻えて水底の月を撈するが如きで何に得られないのである。元聲は只だ爾が心上に在つて求めるのである。

洪問ふ。心は如何にして求むるのであります。

『先生』 古人が國を治むるには先づ人心を養ひ得て和平なる。ソコデ。後。ち。に。樂。を。作。る。の。で。あ。る。比。へ。ば。こ。ゝ。に。詩。を。歌。ふ。に。爾。が。心。氣。の。和。平。な。る。時。は。聽。く。も。の。が。自。然。に。悅。懌。興。起。す。る。の。で。あ。る。只。だ。コ。レ。元。聲。の。始。め。で。あ。る。書。に。云。ふ。に。『詩言志』と。志。は。ス。グ。樂。の。本。で。あ。る。『歌永言』と。歌。は。ス。グ。樂。を。作。る。の。本。で。あ。る。『聲依永。律和聲』と。律。は。只。だ。聲。を。和。す。を。要。す。る。の。で。聲。を。和。す。る。は。ス。グ。律。を。制。す。る。の。本。で。あ。る。こ。れ。を。外。に。求。む。る。の。で。は。な。い。

洪が問ふ。古人が氣を候するの法を制するは、此の意はイヅクに取るのであります。

『先生』 古人は中和に體を具へて樂を作るのである。我が中和は原と天地の氣と相應するのである。天地の氣を候し鳳凰の音に協ふとは、我が氣は果して和するや和せないかを驗すに過ぎな

いのである。これは律を成す已後の事である。必ずしもこれを待つて律を成すのではない。今灰管を候ふウツカフと要する時は先づ至日と定るのである。然し至日子の時に恐らくは又た準せられないとすれば、又た何れの處で準を取るのか。

附註 韶ノ九成ハ舜ノ樂ナリ。武ノ九變ハ周武王ノ樂ナリ。○戲子ハ今ノ俗樂ナリ。○葭灰ヲ管ニ入レ冬至ノ前ニ地ニ埋メ置キ冬至ノ氣ガ來タルト管中ノ灰ガ飛ブ。氣ヲ候フトハコレナリ。○黍粒トハ黍ノ粒ヲ以テ管ノ寸法ヲ定ムト云フ。別ニ悉シキ書籍アリ。別段必要ノモノニアラズ。

人過アキマチある時は多く過の上に功夫を用ふるはコレ甑を補ふと云ふものである。其の流弊は必ずする過を文ざるに歸するのである。

附註 甑ヲ補フトハ東漢ノ孟敏ト云フ人ガ甑ヲ荷フテ地ニ墮ス。顧ミズシテ去ル。己ニ破レタリ。視ルモ何ノ益アラント云フ。補甑ノ故事コ、ニ本ヅク。

今人が飯を喫する時は一事前に在るなきも、其の心は常に役々として寧やすからぬ。只だ此の心が忙しきに慣れたるに縁るから、收攝して住ままらないのである。

人一日の間に古今の世界は都べて經過するのである。只だ人は知らない。のである。夜氣清明の時は視ることなく、聽くことなく、思ふことなく、作すことなく、淡然として平懷なので、これは羲皇の世界である。平旦の時は神は清く、氣は朗かに、雍々穆々なので、これは堯舜の世界である。日中以前は禮儀交會し、氣象秩然たるは三代の世界である。日中以後は神氣が漸く昏く、往來雜擾なるは春秋戰國の世界である。漸々昏夜、萬物寢息して、景象寂寥なるは人消し物盡るの世界である。學者が良知を信じて、氣の爲めに亂みだされない時は、常に羲皇己上の人と做るのである。

先生が人を鍛錬するの處は、一言の下に人を感じるは最も深いのである。一日王汝止が出て遊ぶで歸へる時に。

『先生』遊ぶで何を見たのであると。

汝止が云ふ。滿街の人は都へて聖人なるを見ました。

『先生』爾が滿街の人は聖人なるを看るなら、滿街の人も爾を聖人と看るであろうと。

又た一日董羅石が出て遊ぶで歸る時に先生を見て云ふに今日は一つの異事を見ました。

『先生』何の異なることがあるか。

羅石が對ふ。滿街の人は都へて聖人なるを見ました。

『先生』これも常の事である。何にも異とするに足らないと。

汝止は圭角が未だ融けないので、羅石は恍として悟る處がある

のである。ダカラ問ふことは同じで答が異なるのである。皆な其の言に反して進むのである。洪が張叔汝中は丙戌の歲に試に會して歸へり、先生の爲めに途中で學を講じて信ずるあり、信ぜないことはあるといふと。

『先生』爾們は一箇の聖人を拏して人の爲めに學を講ずるから、人が聖人の來たるのを見てもれて走つてしもうから講じ得て行ふことが出來ない。愚夫愚婦となるがよい。ソレなら人の爲めに學を講ぜられるのである。

洪が云ふ。今日人品の高下を見るを要せば最も易くありますと。『先生』何を以てこれを見るのであるか。

洪對ふ。先生は譬へてみますと、泰山が前に在るやうで仰ぎ見るを知らないものは目がない人であります。

『先生』泰山は平地の大なるには及ばないが、何の見られることではないと。

先生が終年外の爲し高きを好むの病を剪裁剖破せられたので、其の座に在る人は皆な悚懼しないものはなかつた。

諸公はこゝに在つて務めてコレ必ず聖人と爲るの心を立つることとを要するので、時々刻々とコレ一棒條痕一擱一掌血と云ふので、能く吾が説話を聴く時は句々に力を得るのである。若し茫々蕩々と目を度らば譬へば一塊の死肉の如きで、打つも痛癢を知らないの、恐らくは終に事を濟すの目的が無い家に歸つて、只だ舊時の伎倆を尋ねるのみで、ナント惜いことではないか。

附註 一棒ノ二句ハ宋時代ノ俗語ナリ。己ニ切ニシテ功ヲ着ツルノ意ナリ。

一友が自から嘆ずるには、私意が萌さず時は分明に自心が知りま

すが、只だ私意をスグ去ることが出来ないのであります。

『先生』爾が私意の萌す時に一たび知るはコレ、爾の命根と云ふので、當下にスグ私意を消磨するはコレ、命を立るの功夫である。

先生が嘗つて學者に語りられたのに、心體上に一念の留滯を著け得ない。眼中に些子の塵沙を留めないと同じことである。些子の塵沙が入るなら、滿眼スグ昏天黑地となるのである。這の一念は但だ私念と云ふのでは無い。好的念頭でも心體上に些子も留め得ないのである。些子の金玉の屑の如き物でも、眼中に入る如きで、ヤハリ眼が開かないのである。

人生の大病は、只だコレ一つの傲の字である。子にして傲なる必ず不幸である。臣として傲なる必ず不忠である。父として傲なる必ず不慈である。友として傲なる必ず不信である。ガカラ象と丹朱

とは俱に不肖であるのは只だ一つの傲の字が一生を結果したのである。諸君が常に此の事を體察するを要するのである。人心は本とコレ天然の理で精々明々にして纖介の染著することがないのは只だ一つの「無我」である。胸中は切に「不可有有」とは即く傲と云ふものである。古先聖人が許多の好き處は只だ「無我」である。「無我」自から能く謙するのである。謙とは衆善の基なので傲とは衆惡の魁なのである。

鄒謙之が嘗つて徳洪に語げて云ふに、舒國裳が一張紙を持つて先生に拱把之桐梓の一章を寫されたしと請ふた時に、先生が筆を懸けて爲めに書せられた「至於身而不知所以養之者」と云ふに、到つて顧みて笑ふて云はれたのに、國裳が讀書中に狀元を過ぎたが、誠に身の養ふべきを知らないのではないであろうか。此の語

を誦して警を求むるがよいと、其の時に侍坐の諸友が皆な惕然として省察したのであつた。

附註 狀元トハ會試ニ及弟シタル甲ヲ云フ。

希顔が問ふ、聖人は學むて至られるとは承知は致して居ります。然し伯夷伊尹が孔子に於ける時は其の才力が終に同じくないので、其の同じくこれを聖と云ふのはドコであります。

『先生』聖人の聖たる所以は只だコレ其の心が天理に純らにして人欲の雜りがないのである。猶ほ精金の精なる所以である。但だ精金は其の成色の足で銅鉛の雜りがないのである。人は天理に純らなるに到る時はコレ聖である。金は足色に到る時はコレ精である。然し聖人の才力も大小の同じくはないのは、猶ほ金の分兩に輕重あるが如きである。堯舜は猶ほ萬鎰の如くで、文王孔子

は猶ほ九千鎰で、禹湯武王は猶ほ七八千鎰で、伯夷伊尹は猶ほ四五千鎰の如きである。才力は同じくなくて天理に純らなるのは同じなので、皆なこれを聖人と云れるのである。猶ほ分兩は同じくなきも足色は同じだから皆なこれを精金と云はれるのである。五千鎰のものを萬鎰の中に入れる時は其の足色は同じである。ダカラ夷尹の堯孔の間に厠（せう）じるに其の天理に純らなるのは同じである。都べて精金なるものは足色にあつて分兩には無い。聖たるものは天理に純らなるにあつて才力には無い。ダカラ凡人にても肯えて學を爲す時は此の心が天理に純らなる時は聖人となられるのである。猶ほ一兩の金を萬鎰に比ぶる時は分兩こそ懸絶なれども其の足色の處に成つては愧づることがないのである。ダカラ人皆可以爲堯舜とはこれである。學者が聖人

を學ぶには人欲を去つて天理を存するに過ぎないのである。猶ほ金を鍊つて其の足色を求むるが如きである。金の成色の争ふ所は多くではない。鍛鍊の工が省きて功はなり易いのである。成色が愈下る時は鍛鍊が愈難いのである。人の氣質には清濁粹駁が中人以上、中人以下の別がある。其の道に於ては「生知安行」と「學知利行」とがある。其の下は必ず人は一たびすれば己れは百たびし。人が十たびすれば己れは千たびせなくてはならない。其の成功に及ぶ時は一つである。

後世は聖と作るの本はコレ天理に純らすることを知らないから却えて専ら知識才能上に聖人を求むるので、聖人は「無所不知」「無所不能」と思ひ、我れは聖人許多の知識才能を以て逐一に理會しては始めて得られるものだとするから、天理上に功夫を着く

るを務め得ないので。徒らに精を弊らし力を竭して書籍上より鑽研し。名物上より考索し。形迹上より比擬して。知識は愈々廣くして。人欲は愈々滋へ。才力は愈々多くして。天理は愈々蔽れるのである。チウト人が萬鎰の精金があるを見て。鍛鍊成色が彼の精純なるに愧づるなきを務めなくて。妄りに分兩の多いのを希ひて。彼の萬鎰に同じきことを務むる時は。錫鉛銅鐵を雜然として投ずるから。分兩は愈々増して成色は愈々下るので。既に其の梢末には復た金はあらはせないのである。

時に徐曰。仁が傍に在つて云ふに。先生の此の喩は。世儒支離の感を破ぶるに足れるから。大に後學に功があるのである云ふた。『先生』吾輩が功夫を用ふるには。只だ目に減ずることを求むるので。日に増すことを求めないのである。一分の人欲を減ずれば。

ス。グ。一。分。の。天。理。を。復。す。る。の。で。あ。る。何。等。の。輕。快。脫。洒。で。あ。る。何。等。の。簡。易。で。あ。る。と。

附註 成色ハ純金ニシテ黄色ナルヲ云フ。足色ハ其ノ精ノ精ナルモノヲ云フ。◎人皆可以爲堯舜トハ孟子告子下篇ニ出ヅ。◎中人以上云々ハ論語雍也篇ニ出ヅ。◎人一己百云々ハ中庸ニ出ヅ。

失題

高杉晋作

王學振興聖學新 古今雜說遂沈湮
 唯能信得良知字 卽是羲皇以上人

陽明學真髓終

陽明學真髓

春 日 遊 蕪 湖 先生 答 雷 恭 書

春風吹綠柳，燕子剪輕盈。
湖上波光漾，山前翠色凝。
遊人爭畫舫，遊客競芳馨。
我亦攜樽出，同君共賞情。
詩成情未已，興盡意猶盈。
願借東風力，吹花散滿城。

先生詩句，清麗脫俗，
讀之令人胸襟豁然。
余亦效顰，聊表寸心。
惟恐才疏學淺，難稱雅意。
幸蒙不棄，賜教數言，
感佩之餘，更覺愧赧。
後當努力，以副雅意。
此頌。
某某 謹啟

春風吹綠柳，燕子剪輕盈。
湖上波光漾，山前翠色凝。
遊人爭畫舫，遊客競芳馨。
我亦攜樽出，同君共賞情。
詩成情未已，興盡意猶盈。
願借東風力，吹花散滿城。

本月朔日之來書屆候時下愈御安寧珍重存候近來口御用多之趣事上
練磨更に得力之處も可有之御出精尊一に祈入候來亦に讀書之時は
快然なれ共事に臨面は紛擾之由是は如何之事哉昔與事臨に於ては
兩邊無之畢竟心上磨練之不熟より如此同異に相成候只々不意之中
毀譽得失之種清掃蕩致し候候間何と無紛擾之患は世間之事
一切靈府に不入翫然進然に候へば萬事酬酢紛擾之患は無之と存候
是等之事傳習録中に親切之訓も有之兼々熟講之事に候へば申迄も
無之候得共只書木上之熟講多事實之熟練少と存候右様と存候今日
幸に事上練磨之時に及候珍重之至に存候爾來に傳習録講會之由尤
宜しと存候當更此書を獨看前日より一倍妙に覺候只吾胸中に篤
志反求無之而は此錄讀過々々打過候迄之事に而何事も不覺候篤信
好學守死義道八字書輩平生護身符に而筆端難筆盡候先御報如此也

十月十七日

潛菴

未廣兄

二日傳習録中第一章親民教養二件實に王道之始也養之事條件不
一教之事亦然吾輩より言は教第一養養之後に才人民より言は養
第一養而教次之此事子細に講究不致候而は政体に於て其權りな
起し候如何親字教養を兼誠に至妙之道理只文字之事に無之近來
然に妙を覺候王政不過之此等處等閑不可過也

春日潛菴先生傳

孫昇一郎撰

潛菴先生は平安の京に生れ、徳川幕府の末造に方り、夙に勤王の志を抱き、皇室の式微を憂憤して皇政の興隆を企圖せり、嘗つて曰く夫れ志を得て惠澤民に加はり、民をして其の所を獲せしむは固より襄の願ひ也と。又た西郷南洲に與ふる書中に曰く、士人の業は上主を尊び下は民を安むするのみ、尊主安民は其の大綱也と。是れ先生平生の志也。先生姓は源、春日氏、諱は仲襄、字は子贊、潛菴と號す、晩年號を以て通稱と爲す、初め從五位下讃岐守に叙任す。(爾來官位の昇)其先は一品式部卿敦實親王第二子、贈正一位左大臣雅信公七世の孫、從五位上修理大夫仲康朝臣。(諸朝臣第五辻子)に出づ、京都春日の坊に居る。因つて氏と爲す、其の後仲興朝臣に至り、宮内卿に任じ、從三位に叙す、應永十三年正月廿六日薨す、後世に至り久我氏に屬し、世々諸大夫たり、父は正四位下筑前守仲恭朝臣、母は勤修寺家臣漢城氏、先生は文化八年八月三日を以て京都橋圖子の邸に生る、十二歳父を喪ひ、零丁艱苦、母氏賢行あり、子女を教ふるに義方を以てす、稍や長じて讀書筆札を習ふ、十七歳鈴木恕平に就き、程朱の學を修め、嶄然頭角を露はす、廿七歳に至り王陽明全集を讀み、大に啓發する所あり、喟然として嘆じて曰く、聖學の淵源は此に在り、吾れ宗旨とす。

春日潛菴先生傳

る所を知ると、是より篤く王子を信じ沈潜反覆其の源流を究め、道德氣節事業一として良知の工夫に出でざるは莫し、時に鈴木恕平之を聞きて喜ばず、屢ば人を遣はして諭示する所あり、先生答へて曰く、舊師の鴻恩は敢て忘れざるも、斯學の宗旨に至りては其の命に従ふこと能はずと、是の時に方り先生の名聲海内に聞ゆ、四方の士京都に遊ぶ者其の門を叩かざるは莫し、而して吉村秋陽、池田草菴、山田方谷等京都に寓せしかば、日夕相共に往來して姚江の旨を講明す、秋陽が嘗つて恒河健に贈る手簡の略に曰く、春日氏其以來も懇情御締交被下大抵は毎月四五回は往來致講學候京都傾蓋可盡心底益友者此人計と被存候と、既にして秋陽は江戸に遊び、方谷も亦た去れり、獨り草菴は洛西松尾山下に棲遲し、惟を下して生徒を教授せり、草菴は初め相馬肇に従遊し、後ち先生に姚江の説を聽くに及び、學問大に進む、而して草菴の王學を修めしは實に先生が誘掖指導の力多きに據る、當時先生の門に入り業を受くる者日に多し、河野通亮、恒河健、鬼頭忠純、岡田眞吾等皆な傑出の士也。

是より先き先生廿六歳久我通明公擢むで家事を幹せしむ、時に家政衰頽して歲入缺乏せり、諸臣を黜陟し弊事を釐革す、三年餘にして家政頓に改まり、財政は年を逐ふて豊富となれり、其の事を處する嚴毅にして且つ果斷也、諸臣之を不便なりとし、竟に要路に

讒誣して中傷す爲めに罪を得て屏居す時に卅歳也、是に於て始めて閑散の人と爲り専ら心を學事に用ゆるを得、京都橋圖子なる自邸の後圃に一菴を結び潜菴と號せり、先生は肅然として獨坐香を燒き、苦茗を羹、書を其の裡に讀む、是の時に方り諸藩の士京都に來りて其の門に従遊する者日に多し、後遊諸子の爲めに西隣の邸に就き塾舎を設け、日に書を菴中に講せり、世子建通公家を嗣ぐに及び、歲計又た支へず、公其の事を用ふる者を黜け、俄然先生を起す、未だ十年ならずして收入は往日に倍蓰す、世人噴々久我氏に春日の在るを稱し、久我で持つた春日か春日で持つた久我かと云へり。

開鎖の論起るや、海外騷然たり、時に先生は深く幕政の日に非なるを憂ひ、鞠躬盡力國事に盡瘁し、内は久我建通公を補佐し、關白諸公と謀議し、外は天下の志士と往來して大に計る所あり、嘉永六年七月某日建通公は三條實萬公と會し、國事を談じて唇を移す、蓋し建通公は關白鷹司政通公の旨を謂ふ、其の意に爲らく米國書翰の旨意平穩憎惡すべきなし、近世他邦の通商を嚴禁すと雖も、往昔に在りては諸藩の來信比々之れあり、故に交易は別に患害なかるべし、但だ其の來航地を長崎に限り、若し他港に來らば犯禁を以て之を却くべし、知らず衆論余の説を以て過寬と爲すや、否やと、同月十六日實萬公は米使渡來につきての意見書を作り、其の稿を建通公に示さる、時に公一書を實萬公に贈る

其の書中に曰く。

書翰一見段々勘考候處中、一朝一夕之儀にては無之と存候少々愚意も候得ば猶從跡可申入候先日拜見被仰付御書取一々感心仕候餘り格別に拜見候に付春日讚岐守内々咄申候處ドウカ至極御見込御宜申居候何分此場所承知致居ねば大體崩れ可申と申居候吳々幸甚に存候

是れ外交の事に關して也、又た安政五年四月十四日實萬公の山内豊信公に贈る書翰の一節に曰く。

興之進(大鵬興)入來之節兼て被仰越候に付久我右大將(故從一位久我建通公)役人之儀も有之當

節の都合夫是辨知之事故内々面話御坐候御承知相成候と存候但彼家來春日讚岐守世上に名も御坐候之事自然御聞及之儀も難斗其段は主人にも心得有之候云々

當時先生は實萬公と密かに國事を謀る、而して相互畫策せられたることは、固より機密に屬するを以て、其の消息を知悉するに由なきも、先生が公の邸に至り國事を謀議して深更に至ることは屢ばなりき、公が先生を待つこと極めて厚しと云ふ。時に建通公は議奏官の首席を占む、議奏官とは關白に繼ぎて朝廷機密の事を裁決するの任也、而して幕府より列國と談判の飛報日として奏問せざるは莫し、公其の衝に當る時に在廷の公卿

外國の事情に通曉する者甚だ少なし、先生は公の顧問と爲り毎に機密に參與す、而して公が奏上する所の事一として其の肯綮に的中せざるは莫し、先帝大に驚き給ひ、卿何を以て善く外事を暗するや、公伏奏して曰く、臣が家隸春日讚岐守なる者あり、頗る外國の事情に明か也、臣故に密かに諮詢する所ありと、先帝嗟嘆し給ふ、是れ先生が知遇を受くるの始めにして是より事毎に奏上する所あり。

安政甲寅の歲三條實萬公 先帝の密勅を受け六條有容卿をして之を齊らして先生の邸に就きて賜ふ、先生感泣して之を拜受す、是に於て 先帝の顧問に備り屢ば天顏に呎尺して御諮詢の恩命を蒙る。安政五年十一月廿六日夜、先帝建通公に勅して曰く、朕深く春日讚岐守の勳勞を嘉す、今尙方の扇を與へ以て朕が意を表せむ、當さに他日を竣つて之を賚ふべし、卿其れ之を讚岐守に達せよと、御する所の扇を授け給ふ、當時先生は鷹司政通、一條忠香、近衛忠熙、三條實萬、中山忠能、大原重徳等諸公の有志公卿と計儀して國事に盡瘁す、諸藩勤王の志士先生の門に踵らざるは莫し。

初め幕府老中堀田正睦の京都に入りて外國條約の事を稟請するや、先生は日夜機密に參與す、時に廷議紛々として決せず、一時は幕府に委任するの議あり、是に於て先生は死を決して諸公に建議する所あり、諸公感激して朝議遂に一變せり、老中間部詮勝の將

さに入京せむとするや、近衛忠熙公等相議して曰く、嚮きに堀田正睦入京に際し議奏傳奏は其の旅館に臨めり、是れ朝威を損するもの也。正睦來るや顧問を携へて朝議に列す。詮勝の來るや必ず補佐の者あらむ、惟だ朝廷の公卿其の衝に當る者には、之を補佐すべき者なし、因つて今新に國事御用加勢なる官職を置き地下の官人を以て之れに任すべし、乃ち春日讃岐守及び小林民部權大輔の二人を舉用せば可ならむと朝議既に決す、詮勝入京するに及むで、小林良典を捕へて獄に下す、是に於て朝議一變して其の事遂に行はれず、先生も亦た尋めて獄に下る、嗚呼先生をして其の志を行はしめば成就する所豈に測るべけむや、嚮きに内勅の水戸に降るや、梁川星巖走つて之を先生に告げ曰く、水戸密勅の事先生知るや否や、先生驚いて曰く、僕未だ之を知らずと、因つて嘆じて曰く、天下の義士刑禍に罹るは是より始まらむと直ちに建通公に面して之を問ふ、果して是の事あり、先生大に其の事の誤るを論ず、而して使者を呼び返さむと欲して及ばざる也、西郷吉之助、大久保要等も先生と同意見にして、之を止めむことを謀りて周旋すれども、使者は既に東下して及ばざりし也。星巖一日又た先生に語げて曰く、朝旨未だ幕府に徹底せず、故に公武睽離ハ狀甚だし、外寇將さに起らむとする時に當り、協和せざることを此の如し、僕嘗つて詩法を間部詮勝に授けて其の性行を熟知せり、聞くに彼れ近々京都に入

らむとす、因つて之を大津に迎へて諄々朝旨の在る所を語り以て公武の協和を謀らむと欲す、先生以て奈何と爲す、先生之を善しと稱す、間もなく星巖は急症に罹りて歿す、尋めて詮勝は入京し病と稱して朝せず、吏を四方に遣はして國事の可否を議する者を逮捕す、西郷吉之助、僧月照は西國に走れり、時に先生は豫め其の忌諱に觸るゝ所の機密書類數萬通を取りて悉く之を火中に投して灰燼に附せり、是れ機密の漏洩を防ぎ且つ有志に災の波及せむことを慮りて也、幕吏梁川紅蘭を拘して糺問すれども其の要領を得ず、吏を其の家に遣はして搜索せしむ、時に星巖に答ふる手翰二通あり、是に於て先生は卒かに獄に下さる。明年二月廿五日關東に檻致せられ岸和田藩邸に拘禁せらる、擬するに死を以てする者あり、竟に死一等を減じて永押込に處す。

嚮きに幕府評定所に於て訊問の際先生の密勅を受け及び顧問等の事實を糺す能はず、先生も亦た機密に參與せしことを漏洩せざりし也、然れども幕府は先生が朝廷の機密に參預し、且つ堀田正睦が稟請の事行はれざるの故を探知し、間部詮勝の入京するに際し百方搜索して遂に先生を獄に下せり、井伊大老の安政大獄を起すに方り、京都兩町奉行に命じて、其の黨與を求む、與力加納繁三郎、渡邊金三郎及び酒井忠義、臣三浦七兵衛特に其の犬鷹と爲り、井伊腹臣長野義言、宇津木六之丞等と東西謀を通じ、常に公卿大夫

及び諸士の動靜を大老に報ず、其の一節に曰く、頃竊かに諸公卿及び有志の動靜を採知するに青蓮院宮、鷹司政通、一條忠香、近衛忠熙、二條齊敬、三條實萬、徳大寺實堅、久我建通、中山忠能、廣橋光成、萬里小路正房、大原重徳等の諸公は當時重なる方なり、此外八十餘人は概ね異議を唱ふる者なり、然れども此の如き人は所謂る百姓一揆に過ぎざるなり、唯久我殿諸大夫春日讚岐守なる人あり、夙に王陽明の學を奉じ、頗る強情なる風ありと、蓋し其の人剛強屈撓せざるを云ふ也。

先生の宣告既に決し、京都に放歸せらるゝや、所司代先生の長子相摸守仲襲と同居を禁ず、是れ幕府が先生の密かに書を九重に奉じ、且つ機密に參するを恐れて也、因つて次子仲淵を携へて洛北紫野雲林院邸の別邸に幽居す、所司代尙ほ顧慮する所あり、常に細姦を離外に散布して出入を禁する頗る嚴也、數ヶ月にして平野邸に歸るを許さる、萬延元年三月北堂清操院卒す、其の九月仲襲も亦た病を以て歿す、先生其の身は困厄に罹り、續りて老母を喪ひ、又た長子を失ふ、人生の不幸は一身に集まれり、仲淵家を嗣ぎ、從六位上伯耆守に叙任す、尋りて久我家の諸大夫と爲り、家政を執る、所司代又た先生の仲淵と同居を禁ず、因つて三子仲裝及び一力子を携へて再び雲林院の別邸に屏居す、幕吏其の出入を禁する頗る嚴也、年餘にして天下の形勢大に變じ、有志の士は尊王攘夷の論を唱

へて京都は騷然たり、時に先生は本邸に歸らむことを乞ふ、所司代之を許す、然れども幽屏は未だ解けざる也、文久三年八月特勅を以て其の禁を解かれ、官位に復叙任し、再び久我氏の諸大夫たり、是に於て先生は再び出で、國事に奔走す、當時諸藩有志の士日に先生の門に麤集して密議する所あり。

癸亥の歲八月十三日廷議親征軍議に決し、大和行幸の詔下る、時に久我公供奉の中に在り、先生も亦た陪從の命あり、十八日に至り、俄然廷議一變し、大和行幸を止め、九門を鎖して百官の出入を禁じ、長州の堺町御門の警衛を免せらる。尋りて七卿都を辭して毛利氏に據れり、東久世氏は久我氏の一族なるを以て西行せらるゝに方り、先生は命を受け、て其の家政を管理せり、元治元年七月十七日長兵京都に入り、幕兵と戦ひて敗走するや、輦轂の下死屍縱横日を歴て收座せず、時に先生は久我公に謂つて曰く、古より兵役の餘は往々疫氣を生じ、其の氣に感染し、遂に瘟疫の蔓延に至ること尠からず、今氣候尙ほ熱す、死屍腐臭して其の惡氣に感じ易し、況むて輦轂の下をや、速かに其の死を收座せむこと、竊かに冀ふ所也と、且つ時事急務三事を建議す、公乃ち其の議を納れ、直ちに朝廷に建白せらる、其の文は先生の起草する所也、是より天下の形勢は大に變じ、竊かに討幕の議あり、而して先生は西郷吉之助、大久保市藏、岩下佐次衛門、木戸準一郎、後藤象二郎等の諸

士と竊かに回天の鴻圖を謀議す、時に薩藩周旋方中路權右衛門(延)土藩周旋方溪中新作等は諸藩の間に往來して其の機密を傳へたり、二士は先生の門人也、當時西郷等は中路の邸に宿泊して國事を密議せり。

慶應三年十一月廿日熊本藩士淺井新九郎は藩命を奉じ、老臣と俱に大阪を経て京都に入れり、路薩長土及び諸藩士の人數許多集り居り、京地の形勢容易ならざる也、新九郎頗る心に之を恠み、是の日藩老溝口孤雲の命を以て、先生を平野邸に訪ひて方今の形勢を問ふ、先生彼れの至るを喜びて曰く、子の京に入る必ず由あらむ、且つ方今貴藩の論議は如何と、新九郎對へて曰く、吾藩素より朝廷と幕府を調停し以て同心一體の議を爲す也、今吾藩大藩侯伯と議を定め、極力其の素心と貫徹せば成らざるの理あらむや、故に老臣等も共に入京せし也、先生忽ち膝を進み勵聲して曰く、貴藩の徳川氏に於ける、世の俱に知る所也、貴藩の久我氏に於ける舊姻戚にして親密管ならず、吾公苟も貴藩の事に關すれば心を盡さざるは莫し、貴藩今日の急務は大義名分を辨晰せざるべからざる也、今日の勢何ぞ其れ素志を貫徹すること之れせむや、新九郎曰く慶喜公は頗る徳望あり、公卿諸侯誰か敢て公に及ぶ者あらむ、故に諸侯伯協心戮力し以て之を補佐すれば其の成るや必せり、先生曰く否、然らざる也、其の公子たるの時余も亦た子と其の見を同くし

竊かに以て天下の大事を委任するに足ると爲せり、然るに其の將軍職を襲ぐに及び、其の爲す所を見るに一として取るに足るものなしと、其の言頗る詳悉にして縷々證左を舉げて之を非議し、嘆じて曰く天下の人心今や漸く公に歎然たる者あり、新九郎問ふて曰く、然らば則ち自今大政鹽梅の任に當らしむべき者は、果して何人に在るや、先生曰く吾今薩の西郷(隆)大久保(利)長の木戸(孝)等と議して、既に確乎不拔の計畫を定めたり、彼輩屢ば余の室を過ぎて竊かに熟議せりと、今後起るべき時勢の變化につき先生自己の意見を彼れに詳説せられ、且つ貴藩先世以來力を徳川氏に盡す、余固より之を知れり、然りと雖も自分以往大變更の際に方り、徒らに情誼を以て之を論すべきにあらず、今日は惟だ大義名分を辨晰すること是れ急也、一旦事變に際會すれば則ち誰か措置を失はざる者ぞ、是れ吾公の竊かに憂慮する所以也、冀くは何方様(澄之助長之助)にても速かに入朝し、豫め一藩の方向を定めらるべしと、痛切に之を論せり、新九郎、先生の意見を聞き速かに辭謝して藩邸に歸り、即時溝口孤雲等と相會す、皆な是れ先生の忠言に付議する所あり、孤雲新九郎に向つて曰く、子今より大阪に出て凌雲丸に乗り歸國して形勢變遷の狀を復命すべしと、遂に良公子(良之助氏)上京に決せり、是に於て藩論一變して遂に正に歸せり。

細川氏西陲に居然として幕府を助くるの議を墨守す、當時天下の勢ひ既に推移せり、而して皇政復古に至るの機も亦た熟せり、然かも尙ほ慶喜公を補佐し以て覇業を擴張せむと欲す亦た既に晩し、幸ひにして細川氏は久我公の姻戚たり、而して先生夙に大西郷大久保木戸等の諸士と俱に回天の鴻圖を草藎の裡に定む、敢て之を知る者なし、偶ま淺井新九郎藩命を受けて先生を訪ひ、始めて時勢の變態を聽き愕然として反省する所あり、是れに由つて藩論一變し、遂に諸藩の間に周旋するを得たり、然らざれば則ち尙ほ固有の議を確守して迷夢未だ覺めず、一旦事變に遭遇すれば、則ち西陲亦た一會藩を生ずるや必せり、而して其の士民も亦た魚潰肉爛の災を免かれ難き也、然らば則ち先生勵聲辨論して諸を正義に導びきしは、唯たに熊本藩の大幸のみならず、乃ち忠を王事に盡すもの也、嗚呼先生の勳功偉大なりと謂ふべし。

是の時に方り復古の機既に熟せり、是に於て有志等相謀り縉紳の朝章に練達なる公卿を奉じて大政を釐革せむことを謀る、未だ其の人を得ざる也、一日大久保市藏、岩下佐次衛門の二士先生に就りて窈かに久我建通公を推し以て首相に擬せむことを謀る、時に公は洛西に屏居せらる、先生之れに應せず、大久保等己むを得ず、又た岩倉具視卿に就りて之を謀る、亦た屏居の時也、卿大に喜びて之を快諾す、後ち遂に三條實美公と大政を

輔翼せり、嗣子淵一日燕閒に待す、先生嘆じて曰く曩きに大久保等建通公を奉じて大事を爲さむことを謀れり、然れども吾感する所あるを以て其の意に應せざりし也、識者窈かに嘆じて曰く潜庵先生一朝其の議を納れ事を共にせば、維新の際震天動地の大業を爲すや易々たるのみ、何ぞ岩倉具視卿を待たむや、然るに當時薩藩の議に應せず、又た建通公に謀らざるものは、是れ必ず大に忍ぶべからざる所以ありてか、當時大久保等の議直ちに拒むで應せざるもの、是れ必ず言ふに忍びざる所ある也、嗚呼先生千歳の不遇と謂はざるべけむや、先生は終身逆境に立ち、其の事業の如きも、皆な裏面的にして其の成功の榮譽を双肩に擔ふを得ざりし也。

明治元年正月三日伏見鳥羽の戦起る、時に朝命あり、先生を召す、即時に朝す、議定三條實美公先生に面して曰く、熊本藩兵を擁し今に至るも兵を進めて賊軍を追撃せず、頗る成敗を觀望するに似たり、今より藩邸に至り朝旨を傳宣せよと、先生命を奉じ馳せて其の藩邸に抵り、留守居某に面して朝旨を傳ふ、某伏して奉命して曰く、嚮きに大津口に出兵せり、計るに既に達せむと、是の時先生の表門より入りて朝旨を傳へむとするを聞き、一邸倉皇して裏門より出兵せりと、遂に無事復命するを得たり、朝廷其の勞を稱せらる、蓋し熊本藩に先生の學徳を尊信する者多きを以て也、時に通久公は參與職に在り、先生

公を補佐して大西郷諸士と國事に奔走す、一日參與後藤象次郎先生に面晤して曰く、今や往日に異なり、議定參與の職にあらざれば國事に與り難きを以て、參與職に就かむことを勸説す、先生曰く、苟も朝廷に官位を忝うし久我氏を補佐して國事に奔走するは、朝廷に忠を盡す所以也、何ぞ必ずしも參與職を求めむやと、彼れ之を強ゆる能はざる也、二月通久公大和鎮撫總督に任せられ、府を奈良に開き政刑兵の三事を管す、當時草創の際諸事條緒に就かず、朝廷更に參謀官を命ずるの暇なし、先生公を補佐して萬般の事を裁決すること流るゝが如し、訴訟獄獄皆な自から庭に臨むで聽斷せり、既にして朝廷奈良縣を置き、先生を以て徵士奈良知縣事に任す、固辭すれども許されず、遂に其の職に就く政を爲す嚴正明確にして且つ果斷也、姦人戰慄す、偶ま讒者の中傷する所と爲る、是より固く意を仕途に絶ち同志と學を講じ、有爲の人材を育するを以て樂みと爲す、是より府縣の諸士來りて學ぶ者頗る多し、西郷南洲夙に深く先生を欽慕推服し、常に其の人物を稱す、嘗つて人に語げて曰く、今の青年輩が學問を爲すにも、事業を爲すにも、春日先生の如き立派な御人に就きて學ばば、將來大に爲す有るの人とならむ、余輩の如きは人を教育する任にあらず、因つて先生に就きて學ぶべしと、弟小兵衛及び門下の士十餘名をして來り業を受けしむ、南洲の將さに東京に出で、大政を釐革せむとするや、村田新八を

して時事要領十二ヶ條を諮問せしめ、後ち多く之を採れり、島津久光公の重職を帯び東京に在るに際し、南洲は故山に閑居して出でず、時に先生書を南洲に寄せ時事を論議するもの再び也、十年の亂起るに方り平生親交の故を以て世或は疑ふ者あり、然るに先生風疾に罹り既に病瘵に在るを以て無事なるを得たり、初め先生其の疾に罹るや卒倒して人事を省せず、翌日に至り先生目を張り嗣子淵を呼んで曰く、吾死する後は碑文を吾が友人に託す勿れ、大丈夫の宇宙に照映する所以のものは何ぞ區々たる碑上の文字にあらざらむやと、明治十一年三月廿三日卒す、享年六十又八、京都御室泉谷法藏寺山上に葬る、歿後五年、聖上勤王の勳功を追賞し給ひ祭資金若干を賜ふ、卅六年十一月十三日特旨を以て贈正四位の位記を賜ふ。

先生天資俊邁、峭直容貌魁梧、音吐鐘の如し、眼光炯々として人を射る、自ら身を持つる嚴正にして、閨門の間儼として、朝廷の如し、常に世の堯行禹趨に拘々たる者を卑みて曰く、大海有時乎起狂瀾、大川有時乎生橫流、守常之士、不足共語と、故に終身屯壘、大に其の志を行ふ能はずと、雖も、言行の卓犖、庸儒の夢想する所にあらざる也、其の時事を論ずる極めて遠識卓見あり、平常の志す所、道德と事業に在り、故に意を詞章に用ゐず、然れども其の筆を執るや、千言立どころに就る、紀律森嚴にして、氣骨蒼老たり、書も亦た天矯として

春日潛菴先生傳

其の人と爲りに類せり。抑も先生は平生天下を憂ひ、尊王安民の志を抱き、國事に盡瘁し、屢ば跌き、屢ば仆れ、動もすれば禍咎を得て、囹圄に在ること再び、屯蹙困頓、終始其の志を齎らして展ぶること能はず、然れども平生の言行は必ず忠信孝悌の道也、必ず格物致知の工夫也、必ず經世治國の要也、而して終身跟脚を逆流に立て、其の事業の如き皆な裏面的にして、其の成功の榮譽を雙肩に擔ふを得ざりし也、平生憂患困厄の境に在るも、恬然として之れに安むじ、斯道を講明し、後進を薰陶して、倦まず、其の講ずる所人倫大道を闡明し、志を立つる自から欺かざるを以て本と爲し、至誠以て人に接し、實踐躬行事に従ふを以て教學の主旨と爲せり、其の門下に英俊の士を出すこと少なしとせず、而して先生後進を教導するの篤き死に至るまで、其の風疾に罹り病中に在るも、尙ほ講學を怠らざりし也、關白鷹司政通公嘗つて曰く、春日讚岐守は夙に國典儒籍を修め、以て其の淵源を究め、學徳俱に高し、其の天資英邁にして、國家の棟梁道の大器ありと、其の先生を推稱せらるること此の如し、亦た以て其の人物の一斑を窺ふに足らむか。

畢

246
250

明治四十四年二月廿一日發行
 明治四十四年二月廿一日發行

陽明學真髓與付
 實價 金壹圓川錢

吾往書
 院著作
 權所有

編纂者
發行者

春日昇一郎

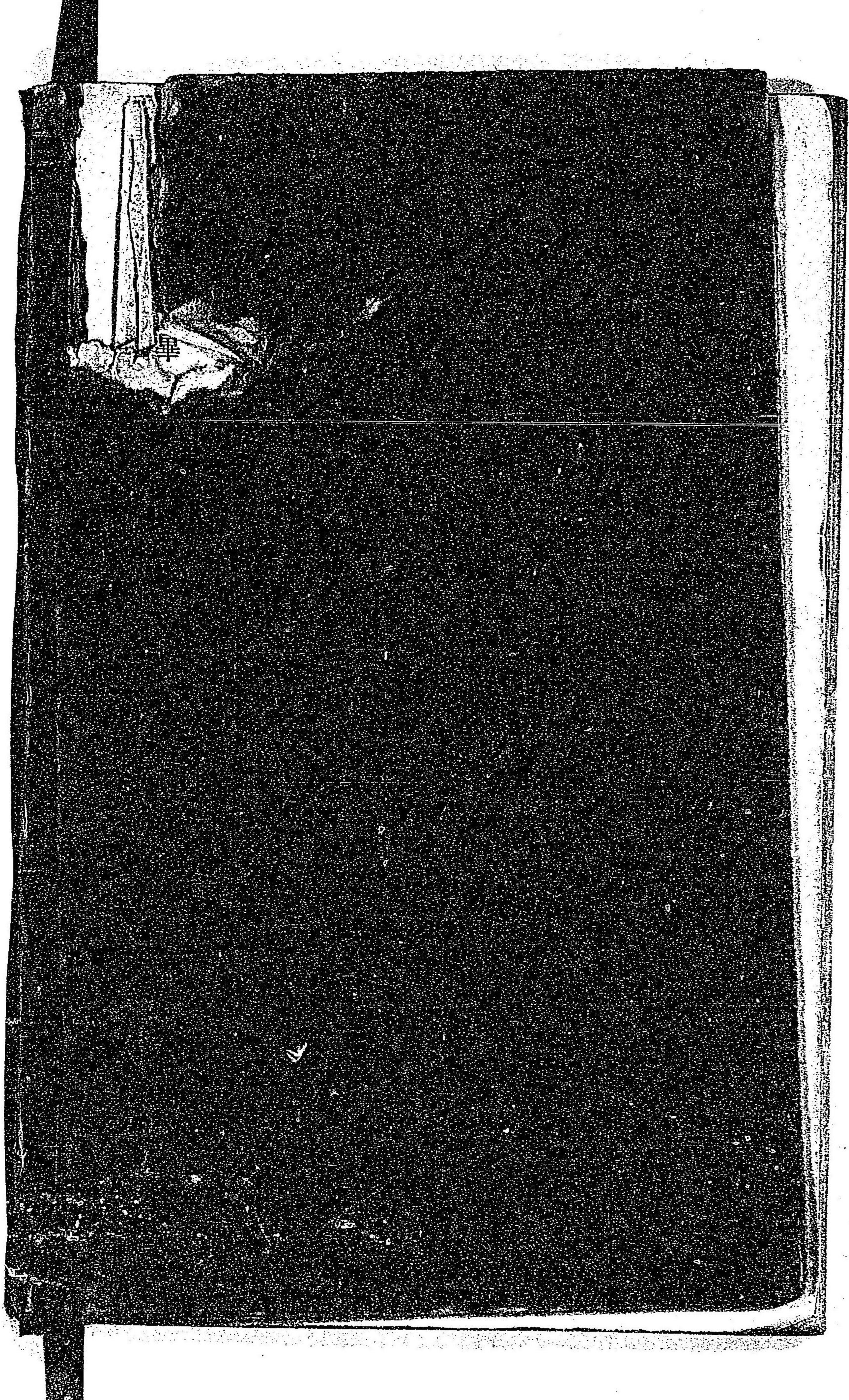
印刷者

門岡甲次郎

印刷所

三田印刷合資會社
 電話一六六五番

東京市芝區本芝入横町卅番地
 東京市芝區三田四國町二番地



008319-000-9

246-250

陽明学真髓

春日 潜菴/著

M44

AAC-0266

